

福岡大学病院 小児科 卒後臨床研修プログラム

I. 特徴

福岡大学病院小児科においては子どもを bio-psycho-social な存在として捉え、小児医療の原点はプライマリケアであるという立場で小児科医の育成を行っている。卒後臨床研修もこの立場で基本的に行う。研修先は、研修医の希望により福岡大学病院小児医療センターと福岡大学筑紫病院の小児科のどちらかを選択できる。

福岡大学病院小児医療センターでは、二次～三次の小児救急、NICU、代謝内分泌、呼吸器疾患、アレルギー、感染症、血液腫瘍、小児神経、発達心理、循環器、腎疾患、心身症など多くの専門医から指導を受ける事が可能である。病棟では、グループ主治医制を取っており、グループの一員として安心して小児科研修を受けることができる。夜間は救急車をはじめ、各地域の急患センターからの受け入れ要請に対して、上級医と共に対応する。

福岡大学筑紫病院小児科は、周産期を除く小児医療全般を扱っている。その特徴は、気管支炎、肺炎、気管支喘息などの呼吸器疾患、麻疹、水痘、ムンプス、髄膜炎などの感染症、熱性けいれん、てんかんなどの神経疾患、嘔吐下痢症、腸重積症などの消化器疾患、種々の疾患に伴う脱水症などの日常診療でよく遭遇する疾患（common disease）が多い。このため、地域に密着した診療を行っており、小児のプライマリケアの臨床研修を行うのに適している。

また、平成 16 年 9 月より開始された筑紫地区小児救急医療事業における中核病院として、月、水、金及び第 4 日曜日の休日・夜間の小児救急を行っている。この際、筑紫医師会小児科医会の医師が、19 時半から 23 時まで当院救急外来にて診療を行っており、小児救急医療の現場で開業小児科医とコラボレートできることも魅力である。

福岡大学医学部小児科のホームページ→<https://fukudai-shounika.net/>

II. 診療科概要

福岡大学病院小児医療センターは、病床数 38 床で、年間入院患者数は約 1400 名である。永光信一郎教授を筆頭に、スタッフ 17 名、助手 8 名で診療をおこなっている。

筑紫病院小児科病棟は平成 25 年 5 月新病棟が完成し、病床数 30 床で、年間入院患者数は約 800 名である。小川厚教授以下 9 名のスタッフ、助手で構成されている。

III. 研修目標

オールラウンドな臨床力を持ち、包括的医療のできる臨床医を育てる。また、社会のニーズや子ども達のために我々に何ができるか常に考えながら、臨床ができる研修医を育てる。

1. 小児医療のプライマリケアにおいて必要最低限な基本的な知識と技能を身につける。
2. 医療人として必要な基本姿勢の中でも患者―医者関係のみならず、良好な養育者―医者関係ができるようにする。

IV. 研修内容

主として病棟において3～6名の患者を受け持ち、小児科疾患に関する診療技術、知識を学ぶ。グループ主治医制で、各チームに所属し診療に参加する。

1. 研修期間は1ヵ月間で、小児科病棟で主治医チームの一員として診療する。
2. 外来における処置にも携わる。
3. 毎朝、前日入院患児のプレゼンテーションを行い討論する。
4. 病棟回診と各カンファレンスに参加する。
5. 研修期間内に行われる研究会や学会には積極的に参加し発表する。

V. 1週間のスケジュール（福岡大学病院小児科）

	月	火	水	木	金
午前	8:30 モーニングカンファレンス				
	9:00～病棟		毎週水曜 10:00～教授回診		
	交代で一般外来トレーニング				
午後	15:30	13:30	13:30	13:30	13:30
	症例検討会	神経回診	病棟、専門外来	病棟、専門外来	病棟、専門外来
	16:00	血液回診			
	抄読会				
	17:00	17:30			
	カンファレンス	神経カンファレンス			

VI. 当科の医療安全等に係る研修医教育

毎月第1月曜日 17:00～18:00	
回	内容
1	小児の蘇生
2	新生児の蘇生
3	小児の輸液療法
4	小児の経管栄養法
5	小児の薬物療法
6	小児の抗菌薬の使い方
7	小児の化学療法
8	小児のけいれんへの対応
9	小児のアレルギー疾患
10	小児の循環器疾患
11	小児の腎疾患
12	小児の内分泌疾患